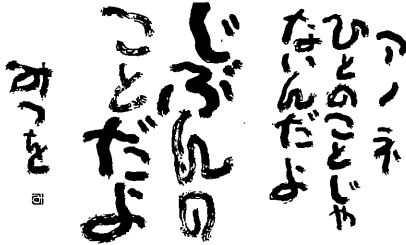


さくら第492号

令和2年12月

さくら

発行所 さくらそろばん
 発行者 平瀬重雄
 春江町境 17-7: Tel.51-1337
 hirase@mx2.fctv.ne.jp



『コロナ感染を振り返り今後に生かす』

さかのぼること1月20日に横浜港を出航したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」が香港、ベトナム、台湾を航海し那覇港から横浜港に戻るまでに、船内で集団感染が発生。

56か国から船員1,045人、乗客2,666人の計3,711人は2月4日に下船するはずであったが感染拡大をうけそのまま横浜港で停泊し種々の検査を受けました。

2月6日に10人が感染者となり以後増え続け634人が感染し14人が死亡。この時点では限られた船内だけの感染として私も大変なことだなと他人事のように思うだけでしたが、その後の感染者は日本国内で増加し続けます。

3月2日の月曜日から全国の小・中・高・大学が一斉休校となり、不要不急の外出は自粛され、手洗い、うがい、マスク着用が要請され今もなお三密をさける生活が続きます。

さくらそろばんでは、4月13日～5月14日まで塾を休みました。3月20日の「珠算優良生徒表彰式」は中止され、各教室での伝達表彰となりました。

3月22日の全珠連検定試験、4月12日の珠算能力検定試験などは施行の1週間前になって急遽、中止。

5月31日の全珠連検定試験と、6月28日の珠算能力検定試験も中止。6月21日と7月26日によろやく全珠連検定試験が施行。8月2日に珠算能力検定試験の段位と準級・4級以下が行われました。7月と8月の全国大会も中止になるなど多くの活動が休止されましたが6月1日からやっと学校へ行けるようになりました。

新型コロナ感染のない過去がどれほど大事であったかを今、つくづく感じています。

ところで災いはいつ起きるか不明ですが、過去の出来事を知ることにより対応策が見いだされることが多くあります。

1918年(大正7)秋から1921年春にかけて大流行したインフルエンザにより日本国内での患者数は2,380万人、直接の死亡者だけでも389,000人といわれています。1918年3月にアメリカで発生。第一次世界大戦中とありアメリカがヨーロッパ方面へ送った兵士から感染が広まり全世界へと発生していきました。

当時のスペインは中立国だったので他の国では制限されていた多くの情報がここから流されたことからスペイン風邪とよばれました。

福井県での患者数は1918年の第一回流行で237,510人、志望者が4,077人。第二回流行の1919年では15,053人が感染して1,026人が死亡。第三回の1920年では1,101人が感染し、9人が死亡とあります。当時の福井県の人口は599,155人でした。

その当時に出された「予防心得」には、人ごみに出ない、マスク着用、うがいの励行、身体弱者はとくに注意するとあり、今と同じです。

スペイン風邪を引き起こした「H1N1型ウイルス」が日本の隅々にまで広がり、もうそれ以上広がる限界を超えたので、スペイン風邪にかり生き残った人々が免疫抗体を得たからともいいます。マスク、手洗い、うがいが重要。

今年の修学旅行は福井県内となり、三方五湖ほとりの水月花で泊まり、縄文博物館や年縞博物館見学、若狭塗箸作り、蘇洞問巡り。

そのほか池田町でのアドベンチャー体験、勝山での恐竜化石発掘。中学3年は芦原温泉に泊まり自分たちだけの花火2,000発打ち上げを間近で見るなど、これまでの大都市での観光地見学とは異なっても、皆で共に過ごした時間は貴重な体験になったことでしょう。

コロナ感染防止策としての行動をネガティブにとらえず、今、できる最善の方法と行動をすることをポジティブに考え、前進しましょう。